

## 〈論文〉

# メキシコ「聖フェリーペ・デ・ヘスス」 に関する一考察

川 田 玲 子 (愛知県立大学非常勤講師)

## はじめに

1597年2月5日、豊臣秀吉によって26人のキリスト教徒(日本人20人を含む)が長崎で処刑されたが、この中にヌエバ・エスパーニャ(メキシコ)生まれのスペイン人で、フェリーペ・デ・ヘスス(本名はフェリーペ・デ・ラス・カサス)という名の若い修道士がいた<sup>1)</sup>。後述するように、彼は1629年にメキシコ市の「パトロン(守護聖人)」とされ、それから2世紀を経たメキシコ独立直後の1826年には、殉教の日である2月5日が「国民の祝日」と定められるなど、「聖フェリーペ・デ・ヘスス崇拜」が19世紀半ばに至るまでの長きにわたって続いたのである。

筆者の知る限りでは、フェリーペ・デ・ヘススについて書かれた文献は、植民地時代には、その殆どがセルモン(説教)であり、1683年のバルタサル・デ・メディーナ神父の書が唯一伝記として紹介できる。1812年にアントニオ・ピチャルド神父が未完の研究書を残しているが、両親の家柄やフェリーペの生涯を扱ったものであった。19世紀および今世紀に入っても彼の生涯を扱ったものがほぼ主流を占め、1954年には長崎の26聖人に関する膨大な文献目録書が出版されたが、「聖フェリーペ崇拜」を扱った文献は見当たらない。

本稿では、ヨーロッパで出版された殉教直後の記録、メキシコ市参事会

(以下メキシコ市カビルドあるいはカビルドと記す)の議事録, 多数残されたセルモンなど当時の史料をたどりながら, メキシコ・クリオージョ(植民地生まれの白人)のシンボルとしての「聖フェリーペ崇拜」が形成発展していった過程を考察してみたい。

最初に「フェリーペの実像」, すなわちその短い生涯について<sup>2)</sup>, 現在までに明らかになっていることを記しておきたい。

フェリーペ・デ・ラス・カサスは, 1571年3月27日付渡航許可証によりヌエバ・エスパーニャへ渡った, スペイン本国人夫婦(アロンソ・デ・カス・カサスとアントニャ・マルティーネス)の子として生まれた。商人であった父親のアロンソ・デ・ラス・カサスは, ニエバ・エスパーニャで当時既に航路が開かれていたマニラを拠点としたアジア貿易に携わり, かなりの成功をおさめた。

この夫婦は, 総勢10人ないし11人の子宝に恵まれ, 1597年の殉教当時25歳前後の青年だったと言われているフェリーペは, スペイン出発時には子供の登録のなかったこの夫婦の第一子と推察されている。その誕生に関しては, ニエバ・エスパーニャへの航海の途上で誕生した, 上陸直後に生まれた, あるいは上陸後暫くして誕生した, といった幾つかの説が後に出されている<sup>3)</sup>。また, 出生場所に関しても19世紀始めまでの諸文献で, 数カ所挙げられており<sup>4)</sup>, 正確な場所はわかっていない。

当時, 教会が誕生から死まで管理していたという事実からすれば, 教会の洗礼記録に氏名が記載されているはずである。フェリーペ研究の第1次資料となる文献を残したバルタサル・デ・メディーナ神父が1683年に, 「洗礼記録を調べた結果, フェリーペの生まれた年代(1570~1575)部分の記録が所定の場所になく, 彼の名を見つけることは出来なかった<sup>5)</sup>」と記している。その後現在まで, 関連する公的資料は見つかっていない。

ところで, 当時のヌエバ・エスパーニャで成人したクリオージョが就く職として, 聖職が最も望ましいものと考えられていた。正確な年齢は不明であるが, 青年期に入ったばかりのフェリーペも宗教の道を選び, プエブ

ラ・デ・ロス・アンヘレス市（現在のプエブラ市）のフランシスコ会の門をたたいた。これは長続きせず、まもなく還俗するが、この理由を詳細に伝える資料はない。その後、父親の仕事を手伝ったようであるが、これに関しても銀細工の仕事であったとか、商人として働いたとか言われるが明らかではない。しかし、その後の足どりは明らかで、1591年にフィリピンのマニラに渡り、2年後の1593年に再び聖職に就くことを決意し、再度フランシスコ会の門をくぐった。翌年、「ヘスス」の呼称を与えられ、同会の聖歌隊に所属したと伝えられている。暫くしてフェリーペは司祭叙任を許可されるが、マニラには叙階式を行う司教がいなかったため、ヌエバ・エスパニーニャへ帰郷することになり、1596年7月12日、ガレオン船サン・フェリーペ号でアカプルコへと出発した。しかし、途中嵐に遭遇して船は難破、同年10月<sup>6)</sup>に土佐の浜辺に漂着した。漂着後、同船していた修道士とともに大坂に向かうが、秀吉の統治下の日本で宗教問題の渦に巻き込まれ、他の25人のキリスト教徒とともに1597年2月5日長崎で処刑され、「フェリーペ・デ・ヘスス」はその生涯を閉じたのである。

死後30年を経て、1627年列福され、その2年後の1629年にはメキシコ市のパトロン（守護聖人）とされた<sup>7)</sup>。その後1826年には独立国家メキシコによって、彼の殉教の日である2月5日は国民の祝日、聖フェリーペ・デ・ヘススの日と定められ<sup>8)</sup>、それは1859年まで続いたのであった<sup>9)</sup>。

## I. 殉教事件と反響

### 1. 旧大陸での反響

殉教事件の概要は、その直後から書簡を通じて各地に——主に日本からマニラ、マニラからスペインあるいはローマへ——伝えられた<sup>10)</sup>が、ここではまず、1600年前後に旧大陸で相次いで出版された「1597年の殉教」をテーマとした初期の文献を通じて、この事件がどのように受け取られたかをみていく。

1598年、フィリピン総督フランシスコ・デ・テージョによって書かれた、

紙葉2枚の書簡が、『フィリピン総督ドン・フランシスコ・デ・テージョは、昨年1597年、修道士に勇気づけられながら死んでいった改宗した20人の日本人とともに、日本で処刑されたフランシスコ会の6人のスペイン人に関する手紙を送る』と題されていち早くグラナダで印刷され、その後一年間にスペインを中心としてヨーロッパで繰り返し印刷された。そこには、日本での布教に関する簡潔な説明と、殉教の概要が記述されている。題に「6名のスペイン人修道士」という言葉があり、書面の最後に「神の意思による、スペインおよびフランシスコ会の名誉である、栄光の聖人」と記されており、スペイン人修道士に起こった事件として印象付けている。

次に、1599年にイエズス会士ルイス・フロイス<sup>11)</sup>が書いた『1597年2月5日、日本の王の命令で十字架に架けられた、6人のフランシスコ会士、3人の日本人イエズス会の信者と17人の日本人フランシスコ会の信者、26人の栄光なる死に関して』<sup>12)</sup>がローマで出版されるが、これは当時フロイスが日本に滞在していたこともあって、詳細な内容の文献となっている。原稿がスペイン語で書かれていたにもかかわらず、スペイン語版は今世紀まで出版されず<sup>13)</sup>、イタリア語翻訳版を初版とし、引き続き1604年までにドイツ語、ラテン語、フランス語に翻訳され、旧大陸の大都市で——現在のイタリアの大都市を中心に——版が重ねられた。「フロイスとフェリーペは日本で知り合った」と言われている<sup>14)</sup>が、当時の日本の布教活動を踏まえ、殉教に至るまでの状況を扱ったフロイスは、「日本でのキリスト教化に大いに意義のあるもの」として事件を捉えており、特にフェリーペに注目している様子はない。

同年にフランシスコ会士ファン・デ・サンタ・マリアが、『日本で受難した6人のフランシスコ会士と20人の日本人信者の殉教に関して』（副題「5人の修道士とともに殉教したフランシスコ会の聖人修道士ペドロ・パウティスタが日本の総督、太閤様に送られた使節として果たした真実と概要に関して」）をマドリッドで出版した。この書はその後イタリア語、フランス語にも翻訳され再版が続いたが、パウティスタ神父を中心に扱っているこ

とを副題が示唆している<sup>15)</sup>。

1601年、フランシスコ会修道士であるマルセロ・デ・リバデネイラが、『フィリピン、中国、タタール、ベトナム、マラッカ、シャム、カンボジア、日本の歴史およびそれらの地域での、フィリピンの聖グレゴリオ教会フランシスコ会修道士の歴史——日本の殉教者である6名のフランシスコ会士の同胞であり、尊い殉教の目撃者である修道士マルセロ・デ・リバデネイラ執筆——』<sup>16)</sup>を、バルセロナで出版した。フロイス同様に、殉教当時日本に滞在しており、日本について詳説した第4巻で、長崎の26殉教者について報告している。そこではフェリーペについても、ヌエバ・エスパニーヤでの生活に触れながら次のように紹介している。

「・・・殉教の可能性は低かったが、神は彼を殉教させんがために日本に送ったのだ。・・・ヌエバ・エスパニーヤのメキシコ市出身であり、裕福で正直な両親のもとに生まれた。大変な悪戯っ子で、プエブラの聖フランシスコ修道院に入った。(小僧として続かなかったが)その後両親に大金を与えられ、マニラへ送られ、到着当初の数年間には贅沢な生活を続け、自由奔放に生きた。神の導きによって、再びマニラのフランシスコ会修道院に入った。今度は清貧・服従・貞潔を遵守し、・・・誓願式の3年後、当時マニラには司教が不在であったので、司祭叙階式を受けるためにサン・フェリーペ号に乗船し、ヌエバ・エスパニーヤに向かった。途中、嵐にあい、日本に流れ着いた。当時の日本に司教が赴任していたこともあり、司祭に叙階してもらうために大坂へ向かった。・・・十字架に架けられたフェリーペの喉を鉄の首かせが締めつけていたので、・・・そのため、最初の処刑者となった」<sup>17)</sup>。

しかし、他のスペイン人修道士に比較すると記述は簡単で、リバデネイラは司祭バウティスタや司祭アスンシオンを中心に殉教を語っている。

同年イエズス会士ルイス・デ・グスマンは、『日本国におけるキリスト教布教のためにイエズス会士がおこなった宣教の歴史』をアルカラで出版した。グスマン神父は、この書で殉教についても扱っているが、題名に示さ

れているようにイエズス会士の宣教活動を中心に秀吉との係わりを語ったものである。

以上が文献からみた殉教直後の反響である。1600年前後の一連の文献は、表1にみられるようにスペインの他、旧大陸の各地で再版が相次いでいる<sup>18)</sup>。これは同地において殉教への関心が高かったことを意味している。特にスペイン本国人の手による文献では、この事件を「日本における宣教のためのスペイン人の勝利」として扱う傾向がみられ、26人の殉教者のなかで、司祭ペドロ・バウティスタおよび司祭マルティン・デ・ラ・アスンシオンといったスペイン人修道士に特に多くの項が割かれた。そこでは、クリオージョであり、まだ聖歌隊の一員でしかなかった平修道士フェリーペは日本人殉教者20人と同様に簡潔に紹介され、取り立てて褒められることも功績を指摘されることもなかった。また、この時期に具体的に彼のヌエバ・エスパーニャでの生活に触れているのは、前述の1601年のリバデネイラの文献だけのようである。頻度は落ちているが、その後も引き続き関連する書物が出版されている。しかし、特にフェリーペをテーマとした文献は見受けられない。

## 2. ヌエバ・エスパーニャでの反響

ヌエバ・エスパーニャでは、事件直後に殉教に関する文献が出版された様子はない。1600年前後に旧大陸で出版された文献がどの程度ヌエバ・エスパーニャに渡ったのか不明であるが、殉教は「キリスト教宣教の勝利」「スペイン人の手柄」といったスペイン本国の考えが、そのまま伝わったと考えられる。したがってこの時期に「殉教事件」は、メキシコ市出身とされるフェリーペ・デ・ヘスが特に注目されるための積極的要因と成りえなかったことが指摘できよう。

では1604年から列福式(1627年)までの間はどうかであろうか。スペイン本国人であるが、1604年から1614年にかけてアウディエンシア(聴問院)の司法官として同地に滞在したアントニオ・デ・モルガが、1609年にメキシ

コ市で出版した『フィリピンの出来事』で、殉教についても簡単に触れている<sup>19)</sup>。これが、殉教に触れた同地最初の出版物と言えよう。ここでも「殉教は日本におけるキリスト教の宣教活動のために有意義なものである」として扱われており、取り立ててフェリーペに関心を持った様子はない。次に、1615年、フランシスコ会士ファン・デ・トルケマダが、同様にメキシコで出版した長編『インディアスの君主制』の中で、簡単ではあるがフェリーペについて述べている。

「・・・数年前、大勢の人々とメキシコ市出身のフランシスコ会士（・・・十字架に架けられ殉教するなど思いも及ぶはずもなく、単に両親に会いにヌエバ・エスパーニャに帰郷するつもりであった）を乗せた船が、日本に漂着した。出発時の意図とは異なる運命を彼に授けた神は、他の殉教者と共に十字架に処せられる場所、日本に彼を導いたのだ」<sup>20)</sup>。

3才でヌエバ・エスパーニャに渡ったがスペイン本国人である修道士トルケマダは、上記の引用文にみられるように、フェリーペは殉教するつもりなど毛頭なかったとしている。

殉教後数十年の間にヌエバ・エスパーニャで出版され、多少なりとも事件を扱っている書は、現在までのところ上述の2冊だけと思われ<sup>21)</sup>、旧大陸と比較して、同地での殉教事件への関心は低かった、と指摘できよう。これまでの出版物の状況および内容から、死後列福式までの間にはスペインはもとより当人の出身地でも、フェリーペ・デ・ヘススが特に注目された痕跡はみられないことがわかる。

## II. 聖フェリーペ崇拜の始まり

### 1. メキシコ市パトロン(守護聖人)の誕生

ところで、17世紀のクリオージョがどのような社会状況の中で生きていたか簡単に記しておく。征服直後から導入されたエンコミエンダ制が衰退し、一方では大土地所有制が拡大する、といった植民地の経済体制の変化

とともに、本国出身のスペイン人と植民地出身のクリオージョが区別されていった。アギーレ・ベルトランによれば、1570年から1646年にかけて、スペイン本国人の数は約2倍(6,644人から13,780人)に、クリオージョは約15倍(11,067人から168,568人)に増加し、本国人とクリオージョの差は、約4,400人から155,000人へと大きく変化している<sup>22)</sup>。こうした数字は資料によってかなり差があるが、16世紀中葉から17世紀はじめにかけて、クリオージョ人口が急増したことはまちがいない。上述の二者の間の溝が次第に深まり、「女は金のために男と寝る。一家の主は家を管理する能力もない」とスペイン本国人はクリオージョを軽蔑し、一方、多くのクリオージョはスペイン本国人を「海を越え遙々スペインから我々のメキシコの地にやって来る。昨夜の物売りが一夜明ければ今日は伯爵」と妬むようになっていた<sup>23)</sup>。スペイン本国人優位のもとで、クリオージョはヌエバ・エスパーニャに生まれ育ったというだけで、貴族への道、上級役人や上位聖職者への道などもほとんど閉ざされていたのである。婚姻においてすらも「ガチュピン(スペイン本国人への蔑称)に対し羨望の眼差しを向けていたクリオージャ(植民地生まれの白人女性)は、裕福なクリオージョと結婚するよりも、貧しいガチュピンと結婚することを好んだ」ことが記録されている<sup>24)</sup>。クリオージョは、スペイン本国人への反発と精神的離反を強めていった<sup>25)</sup>。こうした状況のなかで、聖フェリーペ・デ・ヘスス崇拜が形成されていったのであるが、以下その経過を追ってゆくことにする。

1627年にローマ法皇は長崎の殉教者全員を列福し<sup>26)</sup>、翌年その知らせがヌエバ・エスパーニャに届いた<sup>27)</sup>。当時の状況は、メキシコ市カビルドの議事録から読みとることができる。カビルドは、征服者エルナン・コルテスによって征服とともに創設され、スペイン国王にも認可された自治組織であり、当初は植民地管理のための様々な権限を与えられていた。しかし、国王によりアウディエンシアが設置されると、特に都市部のカビルドは次第にその力を弱められていった。17世紀前半の同市カビルドは、市に居住する有力なクリオージョに支配されていた。当時の議事録から推察すると、

教会の祝いの開催に関する決定や市民の経済的な問題、専門職の認可など、日常生活に関する問題を扱っていたことがわかる。

列福の知らせの到着後の最初の反応として、1628年8月31日付議事録に書かれた記述を挙げることができよう。まず、イエズス会士ギジェルモ・デ・ロス・リオスが、同修道会の殉教者である3人の日本人信者の栄光について説明したのち、次のような請願をおこなった。「この王国のカビルドの長にお願い申し上げます。私どもが今述べましたことに対し、貴方様の参列の栄光を賜りますように、また、・・・このカビルドの回廊に明かりを灯し、その恩恵をお示しくくださいますよう、お願い申し上げます」。これに対し、「当市は本日の午後、イエズス会の教会堂に出向くゆえ席を設けること。また、今晚カビルドの建物の中に明かりを灯す。それに対して、当市は30ペソを用意する」というメキシコ市の回答が、同日の議事録に記載されている。

同じ日の議事録によれば、フランシスコ会の修道士フランシスコ・デ・ラ・クルスも、同修道会の殉教者23人のために「9月2日には市中に明かりを灯し、聖歌を歌い、聖フランシスコを思い起こしてほしい」と請願をおこなっているが、こちらは殉教者の一人であるフェリーペを「当市出身の聖人<sup>28)</sup>」「聖人クリオージョ」と説明し、殉教者のひとりがメキシコ市生まれであることを強調している。この請願に対して同市は、即座に以下のように返答している。「このたびの請願をすべて受入れ、また、カビルドの建物中にも市中にも明かりを灯すことを認める。・・・当市は110ペソを用意し・・・祝いの日<sup>29)</sup>まで、金は保管する」。数日後の9月4日付議事録では、同じくフランシスコ会修道士フランシスコ・デ・ベラスコが、9月2日に催された祝いを感謝しつつ、メキシコ市に対し新たに次のように申し出ている。「この栄光のために、殉教が行われた2月にこそ、祝典の機会を設けるべきでありましょう。フランシスコ会では可能なかぎりのことをして、喜びを示したいと考えます。つきましては、メキシコ市も私どもの創立者、聖フランシスコに感謝を示してくださいますように。と申しますの

も、聖フランシスコが当市出身の聖人を当市に贈ってくださったからです。この事実を格別にご理解いただき、申し出ました期日<sup>30)</sup>までに可能なかぎりの喜びをお示しくさせていただきますよう、フランシスコ会の名をもって、当市にお願い申しあげます」。

翌1629年1月12日付議事録には、前年の8月31日と9月4日の請願を踏まえ、メキシコ市が資金を集めたこと、また、殉教者とりわけ同市出身の聖人への感謝を示すために、2月5日に盛大な祝いを催すことが記されている。次に示す同市の説明から祝典の盛大さがわかるであろう。「・・・司教座聖堂参事会員と当市参事会員はともに、宗教行列の順路を決定する。それに当たる通りを清掃し、明かりの用意をしなくてはならない。また、祭壇を用意するように。さらに、各地域の入口には花火を準備するべし。・・・当市は仮装した人々の夜の行列のために50名を参加させる・・・」。さらに、同日の「フェリーペをこの市のパトロンとしてほしい」という聖フランシスコ修道院および聖ディエゴ修道院の神父らの申し入れに対し、「当市がフェリーペをパトロンとして認めることに関しては、異存がない」と回答しており、ここでメキシコ市は、フェリーペを「市のパトロン」として公認したのである。

ところで、前述の9月4日付議事録で指摘しておきたい点がある。つまり、フランシスコ会修道士は「フランシスコ会の創立者、聖フランシスコがフェリーペを聖人とした」、と述べていることである。これは、後述する「キリストがフェリーペを聖人へと導いた」、という表現とは大きく異なっている。議事録に記載されているフェリーペの呼び名の変化も興味深い。フランシスコ会士らは、列福の名簿録に「聖フェリーペ・デ・ヘスス」と登録されていると主張し、「聖人クリオージョ」としてその価値を公けに認めさせようとしていた。しかし議事録では本名「フェリーペ・デ・ラス・カサス」と宗教人になって後の名「修道士フェリーペ・デ・ヘスス」とが混用されており、カビルドで「聖フェリーペ・デ・ヘスス」のみが使われ始めたのは、1629年2月21日、つまり、フェリーペがメキシコ市のパトロ

ンとされた後であった<sup>31)</sup>。

さらに重要な現象も起こっている<sup>32)</sup>。1629年に詠まれた「聖フェリーペ・デ・ヘススに捧げる詩」<sup>33)</sup>と題した詩の中で、十字架に架けられたフェリーペは、三箇所突き傷を負ったキリストと同じ道を歩む者である、というイメージが創りだされたことである。上述の「聖フランシスコがフェリーペを聖人とした」という考えとは異なった、「キリストとの類似性」を示唆した記述と考えられるものである。この3年後の1632年に描かれた「聖フェリーペ像」にもおぼろげではあるが三箇所の傷口が認められる<sup>34)</sup>〈図1〉。傷口は、殉教当時日本にいたフロイスとリバデネイラの描写とは異なるものとなったのである。フロイスは、「日本の処刑では、処刑される者の胸を一回もしくは二回槍で突く」<sup>35)</sup>と説明している。リバデネイラも、「それぞれが二箇所ないし三箇所突かれ、槍は心臓を貫き、肩に飛び出していた」<sup>36)</sup>と殉教の様子を説明するが、二人ともフェリーペが三箇所胸を突かれたとは記していない。

それまで漠然としていたフェリーペのイメージづくりに大いに貢献したと思われるこれらの詩や絵姿は、殉教を讃え、その事実を社会に伝えると同時に、「聖フェリーペ・デ・ヘスス崇拜」の兆しと指摘できるであろう。この崇拜の兆しは、殉教という事実から生まれたのではなく、むしろ列福を受けたことによるヌエバ・エスパーニャの修道士たちの喜びの中から生まれた、と言うことができよう。そしてメキシコ市パトロンとなったことが、その引き金となったと考えられる。

## 2. カトリック教会と聖フェリーペ崇拜

ところで、前述のメキシコ市カビルドへの請願によれば、当初はイエズス会とフランシスコ会は別々に、殉教者のために祝いの申し入れをおこなっていた。それらの申し入れを踏まえた1629年1月12日の回答では、メキシコ市が司教座聖堂参事会、すなわち、カトリック教会に対して祝典の準備を指示し<sup>37)</sup>、ここで、はじめて教会の聖フェリーペ崇拜への参加がみられ

る。1636年1月18日付議事録では、司教座聖堂参事会が同市に対し以下のように申し出ている。

「教会としては、我が市の息子でありパトロンである聖フェリーペ・デ・ヘスス、すなわち光栄なる最初の殉教者の祝いを持つことは、教会の義務<sup>38)</sup>であると考えていたものの、水害その他の問題で祝うことができない状況にありました。・・・2月5日の祝いの準備を整え・・・当聖人の像を祭壇の一つに安置いたしました<sup>39)</sup>。それ故、市が参列くださることをお願い申し上げる次第であります。この聖人は市の息子でありパトロンであるからであります。

第二には、新たに3つの小教区を当市が持つことを、国王が許可されたことをご承知のことと存じます。・・・主が当市にかような息子を贈ったこと、それは・・・記念すべきことであり、市にとって必ずや有益となることでしょう。それ故、小教区内に建造される教会堂のひとつを、「聖フェリーペ教会」として、栄光の聖人の誕生の地に建てられますことをお願い申し上げます。

最後に、イエズス会<sup>40)</sup>が他の聖人の遺骨とともに所有している、栄光の聖フェリーペ・デ・ヘススの聖なる遺骨を・・・当市が入手することについてであります。・・・遺骨のすべてを入手することに問題があるのであれば、せめて一部なりとも入手していただけますようお願い申し上げます」。

これらの請願に対する同市の回答が、3日後の21日付の議事録に記録されている。

「当市がメキシコ市司教座聖堂に参列することに関しては、当日、聖フランシスコ修道院で祝うこと<sup>41)</sup>を許可し・・・当市は喜んで参列する。また、明かりを灯し<sup>42)</sup>祝うことになろう。

次に、・・・聖人の誕生の地であるサン・ファン・レトラン学校に教区教会堂を建造する件に関しては、同学校は繁華街にあり、最適である。しかし、新たに教会堂を建造することは困難である。すなわち国

王陛下はそれが可能な状況ではない・・・もし熱心な信者があり、資金を提供するというのであれば、当市は必要な許可を与えよう。

最後に、聖人の遺体あるいは遺品の入手については、次の船でマニラの司教座聖堂参事会宛に書面で申し入れる。それ故、当市と当市の司教座聖堂参事会は協力すること・・・当市は必要な費用を用意する」。

このように、司教座聖堂参事会は、メキシコ市から参列の同意をとりつけ、また、「遺骨の入手のための準備<sup>43)</sup>」を指示されたのであった。

聖フェリーペ・デ・ヘスス崇拝を具現化する手段と考えられるこの請願のなかで、注目したい点がある。先にも述べたように、当初は「私どもの創立者、聖フランシスコ」が当市に聖人を与えたとされていたのに、この時点ではキリストを指す「主」という言葉で説明されていることである。教会も聖フェリーペ崇拝へ足なみをそろえるようになったことは、崇拝の確立に向けて大きな一歩となったであろう。

この時点では議事録に申し入れのあった、聖フェリーペ・デ・ヘススの名を持つ教区教会堂の建造は果たせなかったものの、2年後にそれ以上の大きな成果を手にするようになった。1638年、スペイン国王の認可を受け、当時建設途中であった司教座聖堂に、聖フェリーペの小聖堂の設置が実現したのである<sup>44)</sup>。現在、この小聖堂には、18世紀の作品であると言われている<sup>45)</sup>、胸から肩へ突き抜けた二本の槍が刺さった聖フェリーペ像<図2>が安置されている。当初の像は残っておらず、その姿をうかがい知ることはできないが、前述の議事録に記述されていた「聖人の像」が、司教座聖堂内に安置されたと推測することはできよう。

スペイン国王が小聖堂のひとつにフェリーペの像を安置する許可を教会に与えるまでの過程に関しては、資料が入手できず詳細は不明である。しかし、司教座聖堂内に小聖堂を持つという事実がいかに重要な意味を持ったかは、ヌエバ・エスパーニャ社会における宗教の持つ社会的意味を考えれば十分理解できる。教会を中心としたこの時期の一連の動きが「崇拝」

の確立を促したと言えよう。

### III. クリオージョと聖フェリーペ崇拜の普及

#### 1. サンチェスおよびセルナとイメージ形成

当初は「メキシコ市生まれの聖人」という事実だけがその要素であった聖フェリーペのイメージは、17世紀半ば頃から宗教的要素が加えられ次第に変化していった。このイメージ創作のための最初の貢献者はミゲール・サンチェスであったと言えよう<sup>46)</sup>。

クリオージョ出身で有名な説教者であったサンチェスは、1640年2月5日の聖フェリーペの祝いの日に『聖フェリーペ・デ・ヘススへのセルモン』と題した説教をおこなった。ここで「殉教者フェリーペは、他の殉教者と同様に2箇所を槍で突かれた。そして、キリストを真似るように、また、イエスの名を持つが故に、三箇所目のひと突きを与えられた最初の殉教者……」<sup>47)</sup>と具体的に述べ、また、「フェリーペという名は聖人の名であり、フェリーペと名付けられたことが、……最初の予言でもあった」<sup>48)</sup>と訴えている。こうしてフェリーペが殉教者となったのは当然のことと主張したのであった。セルモンの表紙には、十字架に架けられた姿が挿絵として描かれているが、この版画〈図3〉が先に紹介した1632年の版画〈図1〉を真似たものであることはまちがいない。しかしはっきり異なる点は、図1は槍を持った一人の姿が描かれていただけに対し、図3は説教の三つの傷痕の説明を意識し、槍を手にした二人の姿があり、また、初期の姿には微かにしか見えない三箇所の胸の傷痕が鮮明に描かれていることである。

サンチェスは、先に触れた1629年の詩でうたわれたフェリーペとキリストの繋がりについて根拠を示し、その重要性を強調したのであるが、これは「キリストと同じ運命を担ったフェリーペ」というイメージを確立するのに、大いに貢献したと考えられる。さらには、メキシコ市のパトロンとなり社会的知名度が少しずつ高まっているこの人物に注目し、メキシコ出身であることを強調するために「メキシコのフェリーペ(Mexicano Felipe)」

「我等が愛する土地の聖人(Santo de nuestra patria)」「メキシコの殉教者(Mexicano Mártir)」と呼んだ<sup>49)</sup>。そして「最も傑出したクリオージョ」<sup>50)</sup>である聖フェリーペがいかに優れた人物か力説した。

その後1648年にサンチェスは、聖母グアダルupesの出現を扱った最初の書『メキシコに奇蹟的に出現した、神の母、聖母グアダルupes像』と題したセルモンを世に送りだした。その書では、インディオのための聖母であったグアダルupesを「クリオージャ」として扱い、その表紙にサボテンと鷲とともに聖母の姿を添えている<sup>51)</sup>〈図4〉。彼はグアダルupesの新しいイメージも紹介したのであった。

上述のようなサンチェスの意識は、次に聖フェリーペの「祝いの日」のセルモンを出版した司教座聖堂のサグラリオの司祭で、同じくメキシコ市出身のハシント・デ・ラ・セルナへ受け継がれた。1652年の『メキシコ市司教座聖堂でおこなったセルモン』で、彼もまた、キリストとの類似を強調した。さらには「奇跡」までも創作した。死に直面している母親の前に、フェリーペを「復活」させたのである。また、フェリーペを大男<sup>52)</sup>と闘う聖書の中の人物「ダビデ」に例え、当時の日本の権力者秀吉を野蛮人とし、その野蛮人と闘い死をもって勝利したと褒めたたえ、さらに遭難時に鯨がフェリーペを探して来たとし、聖書のヨナのお話とフェリーペの遭難の体験を重ねた<sup>53)</sup>。そしてセルナはフェリーペを「スペインーメキシコ(Español-Mexicano)」人と表現し、アステカのシンボルである「蛇をくわえ、サボテンの上で休息している鷲」にたとえた<sup>54)</sup>。こうして過去のインディオの歴史ともフェリーペを結び付け、ヌエバ・エスパーニャとスペインの文化を併せ持ち、スペイン本国人気質でメキシコ育ちの聖人クリオージョであることを力説した。挿絵には処刑姿があり、その片隅にはあたかもフェリーペの紋章のごとく、アステカのシンボルが描かれている〈図5〉。その後、1853年出版の『聖フェリーペ・デ・ヘスス、メキシコ市パトロン』と題した物語の挿絵に至るまで、アステカのシンボルを伴ったフェリーペの姿はセルモンや他の出版物に繰り返し描かれた<sup>55)</sup>〈図6, 7, 8〉。

1629年の詩をその原点とする「三箇所胸の突き傷というキリストの死との共通点を持ち、ヘススという名の予言通り殉教のためにキリストに代って日本にたどり着いた奇跡の人、神に導かれた聖人クリオージョ、メキシコの聖フェリーペ」という崇拜の対象としてのイメージは、このように確立していったのであった。その後の文献で紹介される像や絵姿には、上述の二人が創り上げたイメージと共通点があることから、サンチェスとセルナがイメージ形成に貢献したことはまちがいない、この時期をイメージの形成段階としてとらえることができよう。

## 2. メディーナと銀細工職人

17世紀後半は、建設開始から100年程を経過していたメキシコ市司教座聖堂——現在のカテドラル・デ・メヒコ、塔はまだ建設されていなかった——が、その外観を現した時期であり、16世紀に建てられた修道院が教会堂や礼拝堂を増改築したり、女子の修道院の数も増えた時代であった。16世紀末には3つしか建っていなかった教区教会堂も、17世紀末には10を数えていた<sup>56)</sup>。この時期、聖フェリーペ・デ・ヘススの名をもった教会堂を持つことは、崇拜を広く普及するためにも重要な要素であったであろうが、1636年にメキシコ市に申請されていた、彼の名をもつ教会堂建立の願いは、資金不足のため実現されないままになっていた。しかしその願いが実ることになった。熱心な信者であったシモン・アロの遺言によって1665年から建設が始まっていたカプティーンナス修道院の敷地内に、1673年、カプティーンナスの教会堂として「聖人フェリーペ・デ・ヘスス教会」が完成したのである<sup>57)</sup>。現在その教会堂は残っていないが、当時その正面ファサードの中央上部には、フェリーペ像のレリーフが姿をみせていた<sup>58)</sup>。

続いて聖フェリーペ崇拜の普及に大きく貢献したのは、バルタサル・デ・メディーナ神父であった。彼は、上述の教会堂完成後十年を経た1683年に、誕生からはじまり、殉教、そしてセルナ神父によって描かれた奇跡を含む、聖フェリーペ崇拜普及の布石となる伝記『出身の地、メキシコ市のパトロ

ン、聖フェリーペ・デ・ヘスス、日本の最初の殉教者の生涯、殉教、列福』を書き上げた。メディーナ神父は、まず生い立ちを記し、そして一度入ったフランシスコ会から離れたことは、フェリーペが日本で十字架の栄光を受けるためであった<sup>59)</sup>と説明する。その他、銀細工職人との係わりも詳細に語り、銀細工職人に対し、既に崇拜していた聖母コンセプションや聖エリヒオとともに聖フェリーペ・デ・ヘススを崇拜すべきである、と説くのであった<sup>60)</sup>。

遺骨の所在地についても、「・・・新たに光を注ぐために、マニラにあった遺体の一部がメキシコ市に移された。・・・メキシコ市カテドラルの聖フェリーペの小聖堂には、脊椎と思われる太い骨と膝蓋と思われる細い骨が納められている。またドミニコ会修道院には、・・・アヤーテ<sup>61)</sup>が納められ、フランシスコ会大修道院には、・・・細い骨が等身大の聖人像の胸に納められている」と具体的に述べ、その他ヌエバ・エスパーニャ内に遺骨が散在しているとし、その所在を詳細に指摘している<sup>62)</sup>。

この書物が出版される2年前に、フアン・デ・アビラは説教の中で、当時流布していたフェリーペ軽視を指摘し、それを敢然と否定している<sup>63)</sup>。そういう風潮については、メディーナ神父も記している<sup>64)</sup>。それまで曖昧のままであった生前の姿を具体的に記述したメディーナ神父の書は、否定的風説を打ち消し普及が不十分であった聖人の崇拜を広めるために貢献したのであった。1689年には、2月5日の祝いにアウディエンシアの参列も決定され<sup>65)</sup>、1751年には、上述のメディーナ神父の本が銀細工職人の資金援助で再版されており、銀細工職人のあいだで崇拜が広まっていたのも事実であろう。

フェリーペが一時期過ごしたプエブラ市のあるプエブラ州、メキシコ市に近いメキシコ州はもとより、クリオージョが多数居住していたモレーリア市、鉱山の町であるサカテカス市などの主要な教会堂に、現在も聖フェリーペの姿が残されている<sup>66)</sup>。アントリン・ビジャヌエバは、コリーマ市と聖フェリーペがどのように結びついたか紹介している。「1700年代に多くの

地震が起こったコリーマ州コリーマ市では、地震避けに聖人を選出することを決定した。そのとき人々の目に青い修道服を着た修道士の姿が映った。彼は、聖人の選出にあたり候補者として聖フェリーペ・デ・ヘススの名を入れるように伝え、忽然と消えた。そこで、彼等はフェリーペの名を候補者リストに記載し、フェリーペは選ばれ、以後、コリーマ市は聖フェリーペ・デ・ヘススを市のパトロンと定めた」とある<sup>67)</sup>。コリーマ市の教会堂では、現在でも聖フェリーペ像が安置されている。

残念ながら、随所にある聖フェリーペ像が、いつ、どの様な経緯で安置されたかについての詳細な史料は入手できなかったが、その広範囲な存在は聖フェリーペ崇拜の普及の結果を物語っていると言える。

## おわりに

聖フェリーペ・デ・ヘスス崇拜は、フェリーペがメキシコ市パトロンとして選ばれると同時に始まり、さらに司教座聖堂内に小聖堂を持つことをきっかけに普及していった。それを単なる「聖人崇拜」以上のものに変えていったのが、クリオージョであったミゲール・サンチェスとハシント・デ・ラ・セルナの二人であった。彼らは17世紀半ば、聖フェリーペとキリストの類似点を強調し、さらには当初何ら関連のなかった奇跡の場面をフェリーペと結び付け、聖人として至高なイメージを創ろうと試みたのであった。聖フェリーペは最も傑出したクリオージョである、と明言したサンチェスにとって、フェリーペはクリオージョの代表であり、シンボルであったのだ。その「クリオージョ聖人」を敢えて「メキシコの聖人」と呼び、またそのイメージをアステカのシンボルと結び付けることにより、「住んでいる土地とのつながりの深さ」を示した。スペイン本国人に反発していた植民地時代のクリオージョは、宗教上の人物を通して、自分たちがスペイン本国人に優るとも劣らぬ価値を持っていることを示したり、また過去のインディオ文化の中にスペイン本国人とは異なるアイデンティティーを求めようとしたことをD. プレイディングは指摘している<sup>68)</sup>が、サンチェスお

よびセルナの聖フェリーペ崇拝はその一例と言えよう。

聖フェリーペがメキシコ市パトロンとなって、1世紀を経た1737年、聖母グアダルーペも「メキシコ市パトローナ・プリンシパル（筆頭守護聖母）」に、1754年には「ヌエバ・エスパーニャのパトローナ」に選ばれ、ローマ法皇ベネディクトXIVにより「聖母グアダルーペの出現」が正式に認められた<sup>69)</sup>。既に社会に広く普及していた聖母グアダルーペ崇拝は、聖フェリーペ崇拝を完全に圧倒していった。そして19世紀はじめの独立運動では、聖フェリーペではなく聖母グアダルーペの姿が掲げられた。この時期の文献に、「聖母グアダルーペに次ぐ聖フェリーペ・デ・ヘスス」という言葉がみられる<sup>70)</sup>が、当時の聖フェリーペ崇拝の状況を物語っていると見えよう。

1821年に独立したメキシコは、1824年に聖母グアダルーペの日である12月12日を国民の祝日と決定した<sup>71)</sup>。聖フェリーペの殉教の日である2月5日が国民の祝日と定められたのは2年後であった。内戦の最中の1859年にフアレス政府は国民の祝日を改定し<sup>72)</sup>、独立記念日などとともに聖母の日は祝日として残したが、聖フェリーペの日は廃止した。そして2年後、内戦に勝利しメキシコ市に入ったフアレス政府は「2月5日」も新たに国民の祝日に加えた<sup>73)</sup>が、それは「憲法の日」としてであった。

1860年2月5日付『ディアリオ・オフィシアル』<sup>74)</sup>の「一日の行事」欄に、聖フェリーペの祝いの日に関する記述が残っている。

「栄光の日本の殉教者、傑出したメキシコ人、当市のパトロン、聖フェリーペ・デ・ヘスス。政府高官、司法関係者、宗教関連団体、学校関係者などが参列する司教座聖堂の荘厳なミサ、(中略)午後には、司教座聖堂から聖フランシスコ教会までの宗教行列がおこなわれる。」

その後の数年間の官報や新聞を調べたが、このような市行列の記述は見当たらない。そして植民地時代に創られたイメージ——最もキリストに近く、アステカのシンボルを伴った「聖人クリオージョ」——も次第に忘れられ、本来のイメージ——日本の26聖人の一人であり最初のメキシコ出身の聖人——へと戻っていった。現在、聖フェリーペ崇拝は殆どのメキシ

コ国民に忘れられてしまっている。

19世紀の衰退を含めた、聖フェリーペ・デ・ヘスス崇拜の全容を歴史の流れの中に位置づけるためには、社会的・政治的背景、さらには図像学的視点などから多元的に分析する必要があるが、それらは今後の課題としたい。

表1 殉教に関する初期文献の出版状況 (1598~1604)

年	著者/出身地	書名	言語*	出版場所	初・再版
1598	フランシスコ・デ・テージョ/スペイン	<i>Relacion que don Francisco ...</i>	スペイン語	グラナダ	初版
	フランシスコ・デ・テージョ/スペイン	<i>Relacion que don Francisco ...</i>	スペイン語	セビージャ	再版
	フランシスコ・デ・テージョ/スペイン	<i>Relacion que don Francisco ...</i>	スペイン語	セビージャ	再版
	フランシスコ・デ・テージョ/スペイン	<i>Relatione Mandata Da Don ...</i>	イタリア語	ローマ	翻訳版
1599	フランシスコ・デ・テージョ/スペイン	<i>Relacion que Don Francisco ...</i> (Existen traducciones alemana y francesa de este mismo año.)	スペイン語 ドイツ・フランス語	不明	翻訳版
	ルイス・フロイス/ポルトガル	<i>Relatione della Gloriosa Morte ...</i>	イタリア語	ローマ	翻訳初版
	ルイス・フロイス/ポルトガル	<i>Relatione della Gloriosa Morte ...</i>	イタリア語	ローマ	再版
	ルイス・フロイス/ポルトガル	<i>Relatione della Gloriosa Morte ...</i>	イタリア語	ポローニア	再版
	ルイス・フロイス/ポルトガル	<i>Relatione della Gloriosa Morte ...</i>	イタリア語	ミラノ	再版
	ルイス・フロイス/ポルトガル	<i>Drey Japponische Schreiben ...</i>	ドイツ語	マインツ	翻訳版
	ルイス・フロイス/ポルトガル	<i>De Rebus Iapomicis Historica ...</i>	ラテン語	モグンティアエ	翻訳版
	ファン・デ・サンタ・マリア/スペイン	<i>Relacion del Martirio que ...</i>	スペイン語	マドリード	初版
	ファン・デ・サンタ・マリア/スペイン	<i>Relatione del Martirio, che ...</i>	イタリア語	ローマ	翻訳版
	ファン・デ・サンタ・マリア/スペイン	<i>Relatione del Martirio, che ...</i>	イタリア語	ローマ	再版
	フランシスコ・デ・テージョ/スペイン	<i>Relation Envoyée par Don ...</i>	フランス語	パリ	翻訳版
作者不詳	<i>Dos informaciones Hechas en ...</i> *2	スペイン語	マドリード	初版	
ファン・デ・サンタ・マリア/スペイン	<i>Relacion Sumaria y Verdadera ...</i>	スペイン語	バレンシア	再版	
1600	ファン・デ・サンタ・マリア/スペイン	<i>Relatione del Martirio, che ...</i>	イタリア語	ナポリ	翻訳版
	ルイス・フロイス/ポルトガル	<i>Relazione della gloriosa morte ...</i>	イタリア語	ポローニア	翻訳版
	ルイス・フロイス/ポルトガル	<i>Histoire De la Glorieuse Mort ...</i>	フランス語	パリ	翻訳版
1601	マルセロ・デ・リバデネイラ/スペイン	<i>Historia de las Islas del ...</i>	スペイン語	バルセローナ	初版
	ルイス・デ・グスマン/スペイン	<i>Historia de las Misiones que ...</i>	スペイン語	アルカラ	初版
	ファン・デ・サンタ・マリア/スペイン	<i>Relacion del Martirio que seys ...</i>	スペイン語	マドリード	再版
1604	ルイス・フロイス/ポルトガル	<i>Recit veritable de la glorieuse...</i>	フランス語	パリ	翻訳版

\*1 文献の表紙に翻訳に使われた言語名称が記載されているものはその言語を、また記載のないものは使用されている言語を翻訳言語とし、それに該当する現代言語名称を充てた。

\*2 *Dos informaciones Hechas en Iapon: Vna De laazienda que Taycosama, señor del dicho Reyno, mando tomar de la Nao S. Felipe, que arribó a el con tempestad, yendo de las Filipinas à Nueva España, y se perdió en el puerto de Vrando; y otra de la muerte de seis religiosos Descalzos de S. Francisco, y tres de la Compañía de Iesus, y otros diez y siete Iapones, que el dicho Rey mandò crucificar en la ciudad de Nangasaqui.*

他の文献の書名については本文に日本語訳で記載されている。

作表にあたり、Agustin Millares Carlo y Julian Calvo, *Los protomártires del Japon (Nagasaki, 1597) Ensayo biobibliográfico* を参照



図 1

出典：Manuel Romero de Terreros y Vinent,  
*Grabados y grabadores en la Nueva España, 1948)*

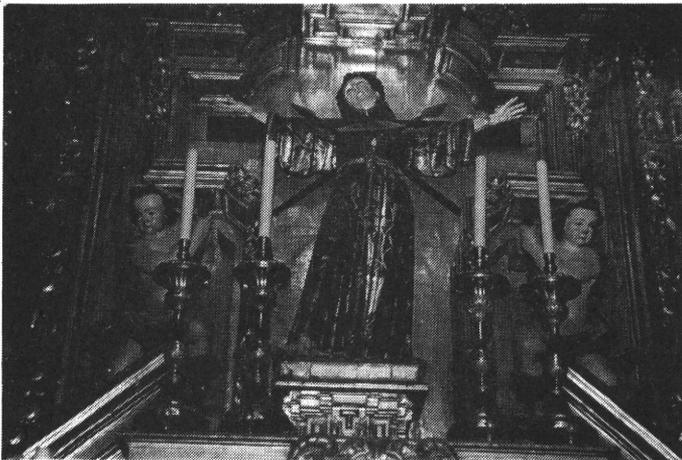


図 2 現在、司教座聖堂 (Catedral de México) に祭られている像

**SERMON**  
DE  
**S. FELIPE DE IESVS.**

(\*)

AL SEÑOR DOCTOR D. LOPE ALTAMI-  
RANO Y CASTILLA, DEL CONSEJO DE SV  
Magestad, Arceidiano de la S. Yglesia Metropolitana de Mexico,  
Commissario Apostolico, Subdelegado General de la Santa Cruzada  
en todos los Reynos de la Nueva España.

EL BACHILLER MIGUEL SANCHEZ.



PREDICOSE LA DOMINICA DE LA SEXAGESIMA  
en el Conuento de la Concepcion; al velo de la Madre  
[\*] Ana de San Nicolas. [\*]

Con licencia en Mexico, por Juan Ruiz, año 1640.

BIBLIOTECA NACIONAL  
MEXICO

図3

(出典：Miguel Sanchez,

*Sermon de S. Felipe de Iesvs*, 1640)



Añode

1648.

**CON LICENCIA Y PRIVILEGIO,**  
**En Mexico, En la Imprenta de la Viuda de Bernardo Calderon.**  
**Vendese en su tienda en la calle de San Agullin.**

---

図 4

(出典：Miguel Sanchez,

*Imagen de la Virgen María Madre de Dios de Guadalupe,*  
*milagrosamente aparecida en la Ciudad de Mexico, 1648)*



図 5

(出典：Jacinto de la Serna,  
*Sermon predicado*  
*en la Santa Iglesia Cathedral de Mexico, 1652)*



図 6

(出典：Joseph Martínez de Adame,  
Sermón de San Felipe de Jesús, 1781)



*Nombra la afortunada Mexico por Patron principal al Bienaventurado Felipe de Jesús, á quien le dio la Cruz.*

図 7

(出典：José María Montes de Oca,  
IHS vida de San Felipe de Jesús protomártir  
de Japón y patrón de su patria México, 1801)



図 8

(出典：Eduardo Riviére,  
*San Felipe de Jesús, patrón de México.*  
*Novela histórica y religiosa*, 1853)

## 注

1) 殉教した26名の内、修道士ペドロ・バウティスタはサラマンカ出身の日本フランシスコ会コミサリオ(管区長)、修道士マルティン・デ・ラ・アスンシオンはビスカヤ出身の教化指導者、修道士フランシスコ・ブランコはガリシヤ出身、修道士フェリーペ・デ・ヘススはメキシコ出身の聖歌隊員、修道士フランシスコ・デ・ラ・パリージャはラ・パリージャ出身、修道士ゴンサロ・ガルシアはポルトガル領インド出身で、6名ともフランシスコ会士であった。他の20名は日本人で、内3名はイエズス会に、残り17名はフランシスコ会に属していた。

2) フェリーペ・デ・ヘススの生涯に関する主な参考文献は以下のとおり。

Baltasar de Medina, *Vida, martirio, y beatificación del invicto protomártir de el Japón San Felipe de Jesús, patrón de México, su patria, imperial corte de Nueva España, en el Nuevo Mundo*, Madrid, Herederos de la Vda. de Juan García Infanzón, 1751(1ª ed. 1683) 但し、筆者が入手したものは、1751年度版に挿絵(ホセ・マリア・モンテス・デ・オカ, 1801年作)を添えたものであり、出版年度は不明である。

José Antonio Pichardo, *Vida y martirio del proto-mártir mexicano San Felipe de Jesús de las Casas religioso del hábito y orden de San Francisco de Manila*, Guadalajara, Ed. Tip. y lit. Fco Loreto y Diéguez Sucr., 1934 (manuscrito 1812.)

Eduardo Enrique Ríos, *Felipe de Jesús; El Santo Criollo*, México, Editorial Jus, 1980 (1ª ed. 1943)

3) フェリーペの出生に関しては、1571年から75年の間で幾つかの説があり、正確な日付は分かっていない。主な参考文献は以下のとおり。

Baltasar de Medina, *op. cit.*, p.10,

José María Montes de Oca, *IHS vida de San Felipe de Jesús protomártir de Japón y patrón de su patria México, México*, Calle del Bautisterio de S. Catalina M. núm. 3, 1801, sp.

José Antonio Pichardo, *op. cit.*, pp.90-94

Antolín P. Villanueva, *Vida del protomártir mexicano San Felipe de Jesús natural y patrón de México*, México, Antigua Imprenta de Murguía, 1912, p. 5

4) 1)サン・フアン・デ・レトラン学校, 2)アルコ通り, 3)サン・フェリーペ・ネリー教会, 4)ティブルシオ通りの4か所が指摘されている。参考文献は以下

のとおり。

*Acta de Cabildo*, (カビルド議事録), 21 de enero de 1636

*Breve resumen de la vida y martirio del inclyto mexicano, y protomártir del Japón, el beato Felipe de Jesús*, México, Impreso en la Oficina Madrileña de la Calle de Sto. Domingo y Esquina de Tacuba, 1802 p.30

Baltasar de Medina, *op. cit.*, p. 7

José Antonio Pichardo, *op. cit.*, p.161

Antonio Vidal de Figueroa, *Novena en honra de el invicto, y glorioso proto-martyr del Japon San Felipe de Jesus*, México, Herederos de Juan Joseph Guillena Carrascoso, 1711 pp. 2-5

5) Baltasar de Medina, *op. cit.*, p. 10

他にJosé Antonio Pichardo, *op. cit.*, pp.95-135が資料として挙げられる。

6) 日本へ漂着した日付は複数挙げられており、正確な日付は不明である。

7) *Acta de Cabildo*, 1629年1月12日

8) *Legislación mexicana o Colección completa de las disposiciones*, México, 1876, 1826年1月28日付載事項を参照

9) *Ibid.*, 1859年8月11日付記載事項を参照

10) 殉教について最初に書かれた書簡は、都（京都）に滞在していたフランシスコ会修道士ヘロニモ・デ・ヘススがフィリピンのフランシスコ会宛に出した、事件の2日後の1597年2月9日付書簡であろう。またスペイン国王宛の初期の書簡としては、1597年3月18日付フランシスコ・デ・テージョの書簡、同年6月20日付修道士ファン・デ・ガロヴィージャスの書簡が挙げられる。これらの書簡は遅くとも1597年末には、スペインに届いたと考えられるが、本稿では、スペイン本国あるいはヌエバ・エスパーニャでの出版物を調査の対象とした。

11) フロイスはポルトガル生まれのイエズス会士で、1563年に日本に上陸、1597年7月8日逝去するまで滞在しており、殉教事件の直接の証人である。また彼は、1583年から十年ほどの月日を費やし『日本史』を書き上げており、日本の状況に精通していた。

12) 日本語翻訳版では、新井トシ訳『フロイス、日本26聖人殉教記』、片岡弥吉訳『長崎の26キリシタン殉教の報告』と題されている。本稿では、文献の題名も重要な史料となるため、できるかぎり忠実に訳した。

13) 筆者が入手した、*Relación del Martirio de los 26 cristianos crucificados en Nangasaqui, el 5 de febrero de 1597* は、イエズス会士ロームアルド・ガルドスが、偶然に発見したルイス・フロイスのスペイン語版の肉筆本を1935年にローマで出版したものであり、本文の最後に「1597年3月15日に書き上げた」と記されている。

- 14) José Antonio Pichardo, *op. cit.*, p.136
- 15) 残念ながらこの文献は入手できなかったため, Agustín Millares Carlo y Julian Calvo, *Los Protomártires del Japón (Nagasaki, 1597) Ensayo biobibliográfico*, México, se., 1954, に紹介されている各章のタイトル及び一部写本されたものを参考とした。
- 16) 日本語翻訳版では、佐久間正訳（マルセーロ・デ・リバデネイラの報告記録）『日本26聖人伝記』と題されている。本文記載の日本語タイトルは、12)と同じ理由でできるかぎり忠実に訳されている。
- 17) Marcelo de Rivadeneira, *Historia de las Islas del Archipiélago Filipino y Reinos de la Gran China, Tartaria, Cochinchina, Malaca, Siam, Campoge y Japón*, reimp. México, Editorial Gatólica S. A., 1947(1ª ed. 1601), pp.568-571
- 18) この時期の殉教に関する書の出版状況に関しては、Agustín Millares Carlo y Julian Calvo, *Los Protomártires . . . sp.* を参照。
- 19) Antonio de Morga, *Sucesos de las Islas Filipinas*, Madrid, Librería General de Victoriano Suárez, 1910 (1ª ed. 1609, México), p.245  
 モルガは1595年よりフィリピン・マニラに滞在していたが、スペイン本国からヌエバ・エスパーニャ経由でマニラに渡ったため、92年から数年間フェリーペの出身地に滞在していた。殉教事件当時はマニラにおり、1597年6月30日付でスペイン国王宛てに「サン・フェリーペ号遭難事件」に関する書簡を送っている。その5日前の25日には「殉教者の日本での生活」を公文書に記録しており、殉教に関する情報を入手できる立場にあった。
- 20) Juan de Torquemada, *Monarquía Indiana*, México, Universidad Nacional Autónoma de México, 1979 (1ª ed. 1615), Tomo V, p.39
- 21) 現在までのところ、1627年以前に「1597年の殉教」を主テーマとした文献がヌエバ・エスパーニャで出版された、という痕跡はみられない。
- 22) 染田秀藤 編著『ラテンアメリカ史 植民地時代の実像』, 世界思想社, 1989, p.59
- 23) Georges Gaudot, *La vida cotidiana en la America Española en tiempos de Felipe II Siglo XVI*, México, Fondo de Cultura Económica, 1983 (1ª ed. 1981, en francés), p.114
- 24) Giovanni Francesco Gemelli Careri, *Viaje a la Nueva España*, México, Universidad Nacional Autónoma de México, 1983(1ª ed. 1976), p.22
- 25) 16世紀から18世紀までのクリオージョ社会の背景に関しては、Fernando Benítez, *Los primeros mexicanos, La vida criolla en el siglo XVI*, Ediciones Era, 1988(1ª ed. 1953, El Colegio de México), David Brading, *Los orígenes del nacionalismo mexicano*, México, Ediciones Era, 1993 (1ª

- ed. en español 1973, SEP SETENTA), Georges Gaudot, *op. cit.*, Jacques Lafaye, “Conciencia nacional y conciencia étnica en Nueva España” en *Mestias, cruzadas, utopías*, pp.128-135, México, Fondo de Cultura Económica, 1988 (1ª ed. en español, 1984),などを参照。
- 26) 列福に到るまでの過程に関する詳細は不明である。現存の資料として入手出来るものは、ファン・オソリオ・デ・エレラが残した要約のみで、ピチャルドによれば、第一次資料となる文献はボトリーニ (1705-1751) に貸与された後紛失したままである。
- 27) *Acta de Cabildo*, 1628年8月31日
- 28) 列福の段階では、「ベアート(福人)」であり「サント(聖人)」ではない。しかしながら、一般的には列副の段階でも「サント」と呼ばれており、この両者は明確に区別されていない。したがって、敢えて「ベアート」と表現される場合はその背景を把握し、分析の対象とする必要があろう。
- 29) フランシスコ会修道士が申し出ている9月2日の祝いを指す。
- 30) 殉教の日である2月5日を指す。
- 31) Fray Felipe de Jesús u de las Casas, Fray Felipe de Jesús de las Casas, San Fray Felipe de Jesús de las Casas, Fray Felipe de las Casas, San Felipe de las Casas などで議事録に記載されている。
- 32) 本文に記述する他に、この時期に描かれた図像としてメキシコ市の南に位置するクエルナバカ市の教会堂に今も残る26聖人の殉教に至るまでの様子が描かれた壁画がある。参考文献は以下のとおり。
- María Elena Ota Mishima, “Un mural novohispano en la catedral de Cuernavaca : Los veintiséis mártires de Nagasaki” en *Estudios de Asia y Africa* No.50, México, El Colegio de México, 1981, pp.675-697
- 33) Alfredo Méndez *Plancarte, Poetas novohispanos* 1621-1721, México, Universidad Nacional Autónoma de México, 1944, pp.33-34
- 34) Manuel Romero de Terreros y Vinent, *Grabados y grabadores en la Nueva España*, México, Ediciones Arte Mexicano, 1948, p.47 著者ロメロによれば、Cánones de la Real y Pontificia Universidad de Méxicoの博士論文に添付されていた版画を模写した。
- 35) Luis Frois, *Relación del Martirio de los 26 cristianos crucificados en Nangasaqui el 5 de febrero de 1597*, Roma, Tipografía de la Pontificia Universidad Gregoriana, 1935 (manuscrito en español 1599), pp.100-101
- 36) Marcelo de Rivadeneyra, *op. cit.*, p.481
- 37) 重要な決定はカビルドの一存ではなく、その都度副王に伺いを立てていた。1629年1月15日付議事録には、パトロンと祝典の決定に関する報告をカビルドから受けた副王の1月13日付回答が記載されている。「・・・カビルドで提

案されたことは大変よろしく、この市の父ともなるやもしれぬこの息子に対し、盛大な祝典を催すことは極めて適切かと考える・・・」。事後報告の形ではあるが、カビルドは副王の同意を得ていることがわかる。

- 38) 毎年2月5日に聖フランシスコ修道院およびカテドラルで盛大に祝うことが、1630年1月11日のカビルドで決定されていた。
- 39) 1630年1月11日付カビルドの議事録に「祝いの日」の行列について、「・・・行列に加わる聖人の像は、聖フランシスコ修道院によって小聖堂に安置されるべきであり・・・」と記されている。前年の1629年の「祝いの日」にも行列は出ているので、29年から聖フランシスコ教会に聖人の像が安置されていたと考えられる。
- 40) マニラのイエズス会を指す。
- 41) 司教座聖堂と聖フランシスコ教会にある聖フランシスコ修道院の双方で祝った。
- 42) カビルドの建物の全回廊を一晩中明かりを灯し祝うことである。
- 43) 遺骨に関しては、後にメディーナ神父がヌエバ・エスパニーヤ内の遺骨の所在を具体的に指摘しているが、いつ、どのように、どこから運んできたかについては資料がみつからず、現在、遺骨も残っておらず正確なところは不明である。
- 44) Eduardo Enrique Ríos, *op. cit.*, p.143 (Archivo de la Catedral de México, Lib. 19, tomo 2, 1638年8月27日付 Ordenanza Eclesiástica)
- 45) Manuel Toussaint, *La catedral de México y el sagrario metropolitano, su historia, su tesoro, su arte*, México, Diocesana de Orden y Decoro, 1948, p. 163
- 46) 1640年2月5日のサンチェスの説教以前に、1638年メキシコ市出身のフランシスコ会修道士ルイス・バカ・サラサル及び翌1639年ドミニコ会修道士ハシント・デ・ラ・カクシカが司教座聖堂で説教をしており、それぞれ説教集として出版されているが、筆者は入手できなかった。ピチャルド神父の解説によれば、前者は「全セルモン数頁のなかで、フェリーペがメキシコ人であることを力説して」おり、取り立ててフェリーペの新しいイメージを紹介した様子はみられない。また前者と全く同じタイトルの説教集を出版した後者に関しては何ら注釈をしていない。
- 47) Miguel Sanchez, *Sermon de S. Felipe de Iesus*, México, Iuan Ruiz, 1640, hoja 10-10rev.
- 48) *Ibid.*, hoja 8rev.-9  
 聖フェリーペ・アポストル、聖フェリーペ・マルティル、聖フェリーペ、ネリー、聖フェリーペ・ベニシオといった聖人の名を意識している。
- 49) 「Mexicano」という言葉の意味は時代によって変化し、その解釈はクリオ

ージョの意識を理解するのに大変重要である。この点に関して、Jacques Lafaye が「ナショナルな意識」という視点から分析をおこなっている。op. cit.を参照

- 50) Miguel Sanchez, *op. cit.*, hoja 13
- 51) Miguel Sanchez, *Imagen de la Virgen Maria Madre de Dios de Guadalupe, milagrosamente aparecida en la Ciudad de Mexico, celebrada en su historia, con la profecia del capitulo doze del Apocalipsis*, México, Imprenta de la Viuda de Bernardo Calderón, 1648, portada
- 52) 聖書に出てくるゴリアテを指す。
- 53) Jacinto de la Serna, *Sermon predicado en la Santa Iglesia Cathedral de Mexico*, México, La Biuda de Bernardo Calderón, 1652, hoja 7-10
- 54) *Ibid.*, hoja 1-3rev.
- 55) 「アステカのシンボル」を伴った聖フェリーペの姿はここに紹介する他にも存在するが、本稿ではこれらの3枚を紹介するに留めた。
- 56) Francisco de la Maza, *La ciudad de México en el siglo XVII*, México, Fondo de Cultura Económica, 1985 (1ª ed. 1968, Fondo de Cultura Económica), Col. Lecturas Mexicanas 95を参照
- 57) Baltasar de Medina, *op. cit.*, p.149  
Francisco de la Maza, *op. cit.*, pp.51-53
- 58) Francisco de la Maza, *Loc cit.* フアレス政府の1859年8月11日付政令により、教会堂の数を減らすことが決定され、2年後の1861年、パルマ通りの一部を開くために解体された。
- 59) Baltasar de Medina, *op. cit.*, pp.21-22
- 60) *Ibid.*, pp.18-20
- 61) 修道服の一部を意味する。
- 62) Baltasar de Medina, *Ibid.*, pp.137-139
- 63) Juan de Avila, *Sermon de el glorioso martyr S. Felipe de Iesus, Patron, y Criollo de Mexico*, México, Imprenta por Francisco Rodriguez Lupercio, 1681, sp.
- 64) Baltasar de Medina, *op. cit.*, Prologo
- 65) *Cédulas y Reales Ordenes*, 25 de mayo de 1689, Tomo 1(núm. 2977) exp. 9
- 66) イダルゴ州シンギルーカンの教会の絵画, モレーロス州クアウトラのドミニコ会パロキアの絵画, ユカタン州メリダの像, メキシコ州ココティツランの教会の像及びアメカメカの教会の処刑姿(像), サカテカス州サカテカスの教会の聖歌隊の部屋に置かれた椅子に刻まれたレリーフ(処刑姿), その他に現存している。また, プエブラ州プエブラには数多くの作品が祀られてい

る。

67) Antolín P. Villanueva, *op. cit.*, pp.104-106

68) David Brading, *op. cit.* を参照

69) Jacques Lafaye, *Quetzalcóatl y Guadalupe, La formación de la conciencia nacional en México*, México, Fondo de Cultura Económica, 1977 (1ª ed. en francés, 1974), pp.348, 428-429

José Gutierrez Castillas, *Historia de la Iglesia en México*, México, Editorial Porrúa S.A., 1974, p.159

Fidel de J. Chauvet con otros, *Album del 450 Aniversario de las Apariciones de nuestra Señora de Guadalupe*, México, Ediciones Buena Nueva, 1981

70) *Breve resumen . . . . .*, p.25

71) Manuel Dublan y José María Lozano, *op. cit.*, 1824年11月27日付記載事項

72) 1859年8月11日付で決定された国民の祝日は以下のとおりである。

日曜日, 元日, 聖木曜日と聖金曜日, キリスト聖体の祝日, 独立記念日(9月16日), 諸聖人の日(11月1日), 死者の日(11月2日), 聖母グアドルーペの日(12月12日), キリスト降誕前夜祭(12月24日)

73) Manuel Dublan y José María Lozano, *op. cit.*, 1861年2月1日付記載事項

74) 保守派が発行していた日刊紙。

[付記] 本稿は、日本ラテンアメリカ学会第13回定期大会(1992年6月7日)での研究報告に基づき、加筆修正を施したものです。ご多忙のなか本稿に目を通し、貴重なご指摘をいただきました愛知県立大学の野田隆先生に深く感謝申し上げます。